

Els fantasmes no toquen a la porta

タイトル幽霊はドアをノックしない

Els fantasmes no toquen a la porta

著者ロシオ・ボニーニャ、エウラリア・カナル

Rocio Bonilla y Eulàlia Canal

出版社プロメラ

Edicions Bromera, S.L.

出版年 201年

ページ数48ページ

言語 カタルーニャ語

読者対象幼児から

ジャンル児童書

レポート作成 中山 映

あらすじ

クマとマーモット（注：リス科の動物）は大の仲良し。毎日会ってダーツで遊んだり、宝物探しをしたり、スターのように歌ったり踊ったりして笑い転げたりする、楽しい日々を過ごしていた。しかし冬のある日、マーモットはクマからアヒルを家に誘ったことを聞く。アヒルのことが気に入らず、クマとの楽しい時間を邪魔されたくないマーモットは、アヒルが来られないように扉に「ぼくたちはいません じゃましないでね」と貼り紙する。質問好きのアヒルは扉をノックし、「いないのに、なんで邪魔できるの？」と尋ねてくる。マーモットは咄嗟に「いるんだけど……ぼくたち幽霊なんだよ」と答え、今度は「ぼくたちゆうれいなんです」という貼り紙をして、アヒルを追い払ってしまう。おやつを作りながら、アヒルがなかなか来ないことを不思議に思ったクマが外に様子を見に行こうとするので、仕方なくマーモットが扉を開けると、そこには雪の塊があり、その中にはギョロギョロ動く目が……。 「うわっ、幽霊だ！」と飛び上がって家の中に逃げ込むマーモット。それは外にずっと立ちつくしていたアヒルだった。「ノックもしないで何してたの？」とたずねるクマに、アヒルは「君たちは幽霊だって書いてあるのに、なんで君たちのことが見えるんだろう・・・ぼくも幽霊になっちゃったのかな？」と答える。クマは「ははは、君はマーモットの幽霊になっちゃったのかな？」と笑い飛ばし、アヒルを家の中に招き入れる。クマが冷え切ったアヒルに毛布をかけ、あたたかいココアを振舞っていると、黒い影が窓の外で踊っているのを見たマーモットが驚いて駆け寄る。「……外に本物の幽霊がいるんじゃないか?!」家の中で恐れおののく三匹。

しかし外にいたのは、ダチョウやカエルなど、「ゆうれい」というメッセージを見て様子を見に来た森の動物たちだった。クマはみんなを家に招き入れ、ケーキを振舞った。それから、みんなでマーモットがする幽霊の話をつのしく聞いたのだった。

それからは、クマ、マーモット、アヒルの三匹は大の仲良しになり、以前のように毎日遊んだり、歌ったり踊ったりして、笑い転げるような楽しい日々を過ごすのだった。

所感・評価

友情のあたたかさをおしえてくれる物語。友人との楽しい時間を独り占めしたいと思う、器量の狭いマーモットの意地悪でひと騒動となるが、常にゆったりと振る舞い、あたたかい性格のクマに皆が癒され、マーモット自身も、気に入らないと思っていたアヒルとも最後には仲良くなり、ほっこりとした気持ちにさせられる。寒い冬が舞台だが、クマの部屋が暖かいのは暖炉や毛布、ココアのせいだけではなく、クマ自身が醸し出すおらかな性格や振る舞いにも関係しているように思えてくる。小さな子どもであれば、幽霊という言葉に少し驚かされるかもしれない

が、登場する動物たちはとても可愛らしく、親しみやすいキャラクターに描かれており、シンプルなストーリーを通じて友情のあたたかさ、やさしさを感じ、寒い日に外から家に帰って暖かい飲み物や寝床、そして家族に癒されるように、心がほっこりする絵本である。

唯一の難点は、マーモットという動物が日本の子どもにはあまり馴染みがないことか。リスやビーバーなどに変えてもいいかもしれない。

試訳（冒頭から）

クマとマーモットは とてもなかよし まいにちのように いっしょにあそんでいます

ダーツあそびをしたり たからものさがしをしたり

クマがおどって マーモットがうたって ふたりはスターみたい

たのしくて ふたりはいつも わらいころげています

ゆうぐれどき ふたりは木のしたにねそべって

きのえだや はっぱが おそらにえがくえを ながめていました

あるさむいひのこと クマはほほえみながら いいました

「きょうはね アヒルがぼくたちといっしょにあそびにくるよ」

マーモットはあひるのことがすきではありませんでした

アヒルだけじゃなく

クマとふたりであそぶのをじゃまするどうぶつは すきではないのです

クマがおやつケーキをつくっているあいだに

マーモットは はりがみにかきました

「ぼくたちはいません じゃましないでね」

そして、それをとびらにはりました

そうして マーモットが三ぽもあるかないうちに トントン……

とびらがノックされました

クマはちょうどジュースをつくるために くわのみをとりにいっていたので

マーモットがげんかんへとはしりました

とびらをあけると そこにはにっこりとしたかおのアヒルがいました

「なんだきみ、じがよめないの？」

マーモットはおおきなこえでいいました

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/els-fantasmes-no-toquen-la-porta>